

『東方』二七五号より

中国語通訳論の一里塚

武吉次朗（前摂南大学教授）

翻訳・通訳という仕事は「三つのオダ」、というのが評者の持論である。オもしろい。ピッタリの訳語を探り当てたときの快感を、一度味わったら病み付きになる。オそろしい。自分の語学力・知識から性格、ひいては全人格まですべてさらけ出してしまうのだから。オくが深い。まさに生涯学習である。

だから達人たちは、長嶋茂雄のバットの素振り、高橋尚子の走り込みと同様に、普段の精進を怠らない。バレリーナの森下洋子によると、レッスンを一日休めば自分で分かり、二日休むとパートナーが気づき、三日休めば観客に知られるそうだが、本書の著者も「通訳者の一生はまさに勉強、努力の一生であり、そうして初めて通訳現場で信頼される不可欠の存在となりうる」（六頁）のであり、知識を獲得し蓄積する「努力を払うか払わないかが、通訳者としての資格を問われるポイントなのです」（七頁）と、随所で繰り返し強調している。

著者の塚本氏の通訳初体験は、前著『中国語通訳』（サイマル出版会・一九八七年）によると一九七三年五月二三日。それから三〇年の間に無数の現場を踏み、時には冷や汗を流しながら悪戦苦闘する中で体得した経験をもとめあげたのが、本書である。それだけに、心構えを説く箇所も技能練習の紹介も、深い味わいに満ちている。

そもそも、通訳とはどのような仕事か。通訳に求められるものは何か。評者は現役のころ、話し合う当事者が言葉

塚本慶一著

『中国語通訳への道』

A5判・三五二頁・大修館書店・二、九〇〇円



の壁を忘れ、あたかも直接語り合っているような雰囲気を作り出すことを理想とし、「空気のような存在」を目指した。塚本氏は歌舞伎の通訳の際に黒子の役割の重要性に気づき、通訳もかくあるべしと、生きがいのある職業としての通訳を再認識するようになったそうだ（四頁）。それを踏まえて、「フイーリング」を持ち、音を伝えるだけの翻訳機をしのぐ「心を伝える者」になろう、と呼びかけている（五頁）。言いかえて妙である。

では、翻訳の基準は何か。これについては、近代中国の思想家、嚴復の「信（忠実に）、達（なめらかに）、雅（美しく）」があまりにも有名であり、今なおこれを超える基準は見当たらないようだ。しかし嚴復がこれを、あえて「訳事三難」として提起したように、訳文で信・達・雅を完璧

▼ 『東方』275号より
一 中国語通訳論の一里塚
▲ 武吉次朗

クリックすると次の段にジャンプします。

に表現するのは至難の技であり、欧州ではこんな格言まで登場する。「Translations are like women……when they are faithful they are not beautiful, when they are beautiful they are not faithful.」これを中国語では「翻訳文好比女人——忠実的不漂亮, 漂亮的不忠実」と訳しており、日本語では米原万里氏がいみじくも『不実な美女か 貞淑な醜女か』と題した本を出している。(徳間書店・一九九四年)

ところが、翻訳には推敲を重ねる時間も条件もあるが、一発勝負の通訳にはそれがない。そこで求められるのは「正確さ」「分かりやすさ」「すばやさ」の三原則である(二二頁)。そのためには、メモの取り方などテクニク面での工夫ももちろん必要なのだが、通訳上達の基本的な心得としては、やはり「常にブラッシュアップは必要」(六五頁)である。

著者はまず、母語である日本語のブラッシュアップを強調する。後から学ぶ外国語が母語のレベルを超えることは有り得ないわけだし、中文日訳で漢文調からの脱却を目指すためにも、日本語の表現を豊かにすることが不可欠なわけだ。この点では、英語の同時通訳の達人である村松増美氏が機内で必ず古典落語を聴くなど、エピソードに事欠かない。

その上で「常に中国語を意識しておく」こと。日本語の新しい単語や表現に出会ったとき、「中国語で何というのだろう」と考えるのだ。その気になりさえすれば、「電車の吊り広告など、目に入る全てのものが勉強になる」(六六頁)とは、体験者ならではのアドバイスである。

目から鼻へ抜ける、ではなく、耳から口へ抜ける通訳のプロセスは、著者によると、聞き取ること、理解すること、

▶ トップページにもどる

表現すること、の三ステップに整理される。単純なようだが、話し手によってはなまりが強かったり、早口だったり、諺や冗談の好きな人もいる。日本人はえてして話しべたで、主語が行方不明になったり、区切りがはっきりしなかったりするし、最後まで聞いても肯定か否定か分からない、という「通訳泣かせ」も少なくない。そこで著者は、話し手の意図をつかむこと、そのため正確に取捨するという高度の判断力も必要と指摘する(二六頁)。キーワードやキーフレーズを瞬間的に記憶することが、ここでものをいう。単なる語学力ではなく、経験と知識に裏打ちされた理解力が決定的になる。

やはり英語の同時通訳の達人である小松達也氏は、通訳にとって大切なのは理解だ、とした上で、話し言葉の特色として、耳で聞いた時に理解しなければ消えてしまうこと、しかし人は考えながら話していること、の二点をあげる。だから、「言葉」にこだわらず、「意味」を正確かつ速やかに捉えることが、通訳における理解であり、そのためには知識が大切になる。小松氏は、今の大学生は英語の力はそこそこ持っているのだが、それを理解につなげるための知識が不足している、と慨嘆する。ここでのいう知識には、話の主題に関する知識、スピーカーに関連する知識、そして一般的知識(常識)が含まれる(『通訳の英語 日本語』文春新書・二〇〇三年)。これらは塚本氏の指摘とまったく符合している。

次に学習の心得に移るが、ここでは聴く・話す・読む・訳すの四つについて、たとえば「話す」では三つの「声」——声量・声調(めりはり)・声風(話し手のパーソナリティーの反映)が解説され、「読む」では多読・速読・熟読それぞれの効用が説明されている。

いよいよ通訳技能の基礎練習だが、クイック・レスポンス、シャドウイング、リプロダクション、リテンション、スラッシュ・リーディング、サイト・トランスレーション、サマライゼーション、ノートテイキング等の項目ごとに、目的・効果、教材、訓練方法、注意点、訓練例が詳細に述べられており、その多彩で科学的な組み合わせ、懇切丁寧な指導ぶりに一驚した。英語通訳の訓練と変わらぬ充実ぶりに、時代の流れを感じるだけでなく、ここまで築き上げてきた著者たちの労苦が偲ばれる。

通訳の実践の章は、著者の豊富な経験のエッセンスといえ、各節の関連表現と合わせ、通訳を志す人にぜひ熟読してほしい。散りばめられたコラムと漢詩選も格好の知識になる。歴代の中国指導者のスピーチ集と通訳者の常識・情報源は、通訳の格調を高め、この書評の冒頭に書いた「人格」の陶冶にもつながる大切な部分だと、評者は受け止めている。

欲をいえばきりがないが、気づいた点をあげておきたい。名通訳は一仕事終えたのち、ちょうど棋士が対局後に棋譜を再現して吟味するように、もっと適切な表現はなかったか、事後の反省を怠らない。著者もきつとその積み重ねを大切にしている筈なので、代表的なものを例示して欲しかった。さまざまな訳し方の比較でもある。

また、翻訳と通訳には相違点があるだけでなく、村松増美氏が『私も英語が話せなかった』（サイマル出版会・一九七八年）で述懐しているように、両方を手がけることによる相互促進の役割もある。中国語の場合には英語と違った効用もあるうから、著者の体験談が聞きたいところである。

この二点については、次回の労作に期待したい。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

いささか自慢めくが、評者が拙著『中国語翻訳・通訳ハンドブック』を東方書店から刊行したのが一九八四年春。内容は稚拙だったが、中国語通訳を取り上げた本としては早いほうだった。それから二〇年。中国語通訳のマーケットは今や英語に次ぐ地位を確保するまでになったが、それに見合っ、中国語通訳論のレベルも、ついに英語のそれに迫るところまで来た、といえよう。本書はその一里塚になる大作である。読みながら、そんな感慨にふけた。